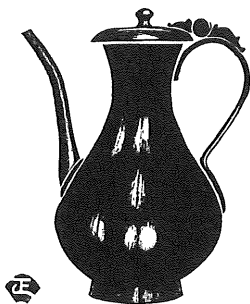




浄瓶 十事 禅房



正

画：正親里紗

志 隆 館

今回は「禅房十事」の中から、九番目に取り上げられている「浄瓶」を紹介します。「じんびん」とも「じょうびょう」とも「じょうびん」とも呼んでいます。

浄瓶というのは、浄らかな水を容れる水瓶という意味です。もともとインドでは、僧侶は常にこれを携帯し、手を浄めるのに用い、僧侶が携帯する十八の道具の一つでした。

中国でも同じように手を浄めるために用いられました。しかし、禅寺でその名が後世にまで残ったのは別の理由もあるようです。第四回目で紹介した、「無門関」という公案集に収録された、有名な「浄瓶」をめぐるお話を紹介したいと思います。第四十則の「趨倒浄瓶」という公案です。

滄山（霊祐）禅師は、始めは百丈懷海禅師の下で典座の職についていました。百丈禅師は、「湖南省にある」大滄山の住持（住職）を選ぼうと思ひ、修行僧に對して悟りの境地を述べさせ、すばらしい僧を見つけて推薦しようと思ひました。百丈禅師は浄瓶を手にとり地上に置いて、

「これを浄瓶と呼んではならない。諸君、何と呼ぶか」と質問しました。首座しよそ（修行僧の第一座）がすぐに、「木片と呼ぶこともできませんまい」と言いました。百丈禪師が向き直って靈祐禪師に同じ質問をしました。すると靈祐禪師は浄瓶を蹴倒して行つてしまいました。百丈禪師が笑いながら「第一座は靈祐和尚に負かされたな」と言いました。こういうことで靈祐禪師が大瀋山の住持とされたのです。百丈禪師は第一回目に登場し、瀋山禪師は第五回目の「弘子」に登場しました。そして、第六回目の「竹篋」のエピソードを思い出してください。竹篋を手に取り、「竹篋と呼んでも間違い、呼ばなくても間違い、ではなんと呼ぼうか」という問答を似ていますよね。

目の前にある日常の道具を使って、悟りの境地を問うわけです。瀋山禪師は浄瓶を蹴倒して行つてしまいます。「浄瓶」を「○○」と呼ぶことを禁止され、その上で「○○」と呼んでしまえば、その価値を定めてしまうこ

とになります。難しい質問ですが、瀋山禪師は蹴倒して回答不能・回答拒否を表現しました。そして、百丈禪師から認められるのです。なぜ、瀋山禪師の方が認められたのかは、皆さんで考えてみてください。

しかし、一方で「○○」と呼ぶことは、現在の日本社会では興味深い問題を提起してくれます。まず、冒頭で示したように、「浄瓶」の日本語読みが、三通り伝わっています。そして、現代中国語の読み方も加われば、四通りです。この状況は、物の「よみかた」にこだわりすぎることでもまた、些末であることを教えてくれているのでしよう。

鎌倉時代の**大休正念禪師**は「禪房十事」の「浄瓶」の偈頌げしよで、瀋山禪師が浄瓶を蹴倒して大瀋山の住持になったから、「浄瓶」が後世の禪寺に伝わったと述べています。靈祐禪師が大瀋山の住持となったきっかけの「浄瓶」であればこそ、禪寺に必要なものとなったのです。

この浄瓶は、現在は僧侶の携帯品としては用いられていませんが、臨濟宗では献湯・献



茶という、仏さまに香湯と茶を供養する儀式の際に、湯を注ぐために用いています。曹洞宗では、同様の儀式で使う場合もあります。臨済宗より浄瓶を用いる機会は少ないようです。

浄瓶を用いる数少ない行事の一つに、京都の建仁寺の方丈で行われている四頭茶会があります。これは現存する最古の歴史を持つ茶会です。この茶会では、僧侶が給仕しますが、最初に抹茶入りの茶碗を配り、その後、「浄瓶」でお湯を注ぎ、最後に茶筥で点てて廻ります。それから、お茶をいただくのです。

四頭というのは、もともと、僧侶の四頭首（四人の頭の役職）という意味で、四頭首に先に茶を入れてから、周りに給仕します。現在では、四頭首の位置は、四人の正客の位置となっています。

この四頭茶会に参加した際、直感的に、もともと僧堂（今の禅堂）という建物で行われていた行事ではと感じました。曹洞宗の僧堂では、四頭に相当する座位が僧堂の中に残っているからです。つまり、中世に建仁寺の僧

堂という坐禅をする建物で行われていた作法が現在に継承され、方丈の室中（本堂の中央部分）で行われるようになったのではないのでしょうか。

鎌倉時代から、「浄瓶」が茶を入れる際に使われていたかどうかは明確ではありませんが、この時代の図像史料には、茶の用具とともに「浄瓶」の形の注ぐ道具が描かれており、その可能性は十分に考えられます。

日本の禅寺では、「浄瓶」は、献湯や献茶、または四頭茶会という儀式の中で伝えられてきました。「茶」とともに伝承されてきたのです。その浄瓶が、「禅房十事」の九番目の道具となっていることは、禅と茶の関係を考える上でとても興味深く思います。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。